

## 83 主役より脇役が目立つという特徴

《聖マタイの召命》・《聖マタイの殉教》・《ダマスカスへの途中での回心》・《エジプト逃避中の休息》・《ペテロの磔刑》

2024

真鍋友範

### 1 主役より目立つ脇役

カラヴァッジョは面白い特徴を持つ画家だ。彼ほどに観衆の感性を弄ぶ画家はいない。何故か。では具体的にどのような内容かを明らかにしたい。

### 2 《聖マタイの召命》

イエスが何処にいるかは比較的容易に見つかる。右端の男の頭部には光輪があることから、この人物がイエスだ。しかし画面の端であり、しかも弟子ペテロの巨体の後ろに存在している。

もう一人の主役は容易には見つからない。何故なら、カラヴァッジョの描いた詳細な動作を、ひとつひとつ読み解いて行くことになる。

よく目立つのは、髭の男、あるいは鑑賞者に近い若い男だ。しかし、どちらも正解ではない。マタイはもっと分かりにくい位置にいる。

登場人物の身体動作を読み解いた鑑賞者だけが、その人物が誰かを知る事になる。



《聖マタイの召命》 1599-1600  
サン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂

### 3 《聖マタイの殉教》

聖マタイの最後は暗殺者による。カラヴァッジョは、聖マタイが洗礼式の場面で、暗殺謀議によって命を落とす劇的場面を再現している。

よく目立つ中央部に、洗礼のために裸に近い姿でいる人物は、洗礼者に紛れ込んでいた暗殺者だ。洗礼式の開始直後であることは、ロウソクのロウがまだ充分

にウシャに残っていることから解る。

では、誰から剣を受け取ったのか。恐らく、参列者の中に紛れていた剣を用意した仲間だろう。

仲間は、いち早く逃げたが、気になって画面奥から振り返って様子を見ている。この人物として、カラヴァッジョ自身が描かれている。

マタイは、暗殺者に手首を抑えられ、正に、剣でトドメを刺されようとしている。

つまり、マタイは暗殺者より下方の位置にねじ伏せられ、目立たない位置なのだ。



《聖マタイの殉教》 1599-1600

サン・ルイーゼ・デイ・フランチェージ聖堂

### 4 《ダマスカスへの途中での回心》

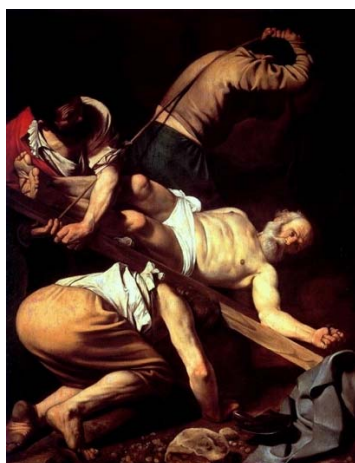
この作品は強烈に常識外の構図だ。馬が主役かと思えるほど、画面中央部に大きく描かれている一方で、落馬したペテロは画面底部に体を横たえ、宗教的恍惚の表情で両手を左右に開いている。



《ダマスカスへの途中での回心》 1601  
サンタ・マリア・デル・ポポロ聖堂

## 5 ペテロの磔刑

この作品は、エックス型構図であり、一方の軸にはペテロが、もう一方の軸の下側には、十字架を持ち上げようとする人夫の尻が大きく描かれている。より観衆より近い位置にある人夫は、もちろん脇役だ。



《ペテロの磔刑》 1600-1601  
サンタ・マリア・デル・ポポロ聖堂

## 6 《エジプト逃避中の休息》

この作品では、休息しているヨゼフ家族一行の前に天使が現れているが、そ

の天使は、まるで主演のように、画面中央部で背中を監修に向けて音楽を奏でている。一般人には思いつかない、カラヴァッジョしか考えつかないような意外性のある画面構成なのだ。



《エジプト逃避中の休息》1596-1597  
ドーリア・パンフィーリ美術館

## 7 主演級に目立つ人物は、時に脇役

これまで見てみると、4点には面白い共通点がある。

【主演級に目立つ人物は、どの作品を比べても、常に脇役なのだ。】これは重要な着目点だ。

## 8 結論

つまり、これら結果からの集約結論として、カラヴァッジョの《聖マタイの召命》に於いても、例外なく、最も目立つ中央付近の【ヒゲの男は、目立つという理由において、逆に主演（＝マタイ）である可能性の低い人物】ということになる。実際その通り、マタイではない。